

# 下溝遺跡群下原遺跡の縄文土器圧痕調査ことはじめ

## －博物館における市民・学生ボランティア研究活動報告－

領家 玲美・相模原縄文研究会

### はじめに

相模原市立博物館では、縄文土器などに残された植物などの圧痕を同定することにより、当時の食生活や植物利用を復元する考古学の新しい調査方法として注目される圧痕レプリカ法等による調査を相模原縄文研究会と断続的ながら継続している。そのきっかけは2014年5月、相模原市教育委員会文化財保護課に所属していた筆者が、旧石器ハテナ館での講演を依頼した北杜市埋蔵文化財センター（当時）の佐野隆氏を、博物館の考古収蔵庫に案内した際、棚に並べられた勝坂遺跡出土の縄文土器に目を止められ、「この土器！すごいよ？」と指摘されたことによる。その土器は縄文時代中期後半の連弧文土器で、外面の口縁部から胴部下端部、内面の頸部くびれ部から上位にかけて無数のオーバーハングした穴がみられた。その当時、圧痕の調査が現在ほどメジャーではなく、恥ずかしながら、知識としては知っていたが、手元の資料で認識することはあまりなかった。目の肥えた研究者には、この土器になにが起こっているのかすぐに検討がついたのである。その後、当時の博物館の考古担当学芸員に相談し、この土器の圧痕調査を託し、後日、佐野氏のチームに加え、山梨県立博物館（当時）の中山誠二氏と共に相模原市立博物館で調査を実施する運びとなった。相模原縄文研究会は圧痕調査の研修を兼ねて一緒に調査を見守った。その結果、土器の内外面にダイズの祖先であるツルマメを主体としたマメ科の植物種子と同定された圧痕が50か所以上確認された。折しも縄文農耕論が提唱された国指定史跡勝坂遺跡の縄文土器から、多量の種実圧痕個体の第一発見である。その後、この調査成果を受け、土器の器体整形時にマメ科植物種子を意図的に練り込んだとみられること、マメに対する縄文人の意識を窺わせ、縄文文化の精神性を解明するための手掛かりになる全国的にも貴重な資料であることから、2016年4月にこの土器は相模原市指定文化財に指定された。あの日、佐野氏を考古収蔵庫に案内していなかったら、佐野氏が講演会にあたって事前に本市の縄文土器を確認したいと思わなかったら…いまだに日の目を見なかったかもしれない。そう思うと、研究者はいかに物を見る目を養うか、

考古資料への視点、視野の広さを持つことが大事であるかということを感じるのである。

これをきっかけに、佐野氏や中山氏を始め、複数の研究者が本市の圧痕調査に取り組んでくださった。これは、本市の圧痕調査のスタートであったと言えよう。

### 1. 相模原市内の縄文時代遺跡圧痕調査概要

市域の圧痕調査は、佐野氏・中山氏により、勝坂遺跡を皮切りに山王平遺跡、田名塩田遺跡群の抜粋調査、米田穰氏ほかによる国指定史跡川尻石器時代遺跡の調査、中山氏・中川真人氏（相模原市学芸員）による下原遺跡の調査が行われている。いずれも多量種実圧痕土器や出土数の少ない晩期終末の土器を調査対象とする、選択的に偏重した資料であった（中川ほか2019）。そこで、中川氏は、博物館に所属していた際、相模原縄文研究会と協力し、市民協働調査として勝坂遺跡第一次調査出土土器の悉皆的な圧痕調査を実施し、基礎データの蓄積を図った。この調査をきっかけとして、博物館において相模原縄文研究会が圧痕調査を進めていく画期となった。

### 2. 相模原縄文研究会と圧痕調査のあゆみ

これまで市内で着手された主な縄文土器圧痕調査遺跡は第1図の通りである。ここでは相模原縄文研究会と共に実施してきた3つの遺跡の圧痕調査活動について順を追って概要を簡単に紹介する。

#### ①勝坂遺跡第1次調査（南区磯部）

出土土器の悉皆調査を目的としたもので、幅1mのトレンチ42本から出土した縄文土器すべてを対象に圧痕調査を実施した。この遺跡から、前述した市指定文化財となった圧痕土器が出土している。調査した土器は総数10,302点、総重量約400kgであった。その結果、顕微鏡観察により土器46点から種実圧痕が54点確認された。また、圧痕が確認された時期は、中期中葉～後期前葉にかけてであり、集落形成期である中期後葉に集中する傾向がみられた。検出された植物種子のミズキやダイズ属、ササゲ属アズキ亜属、シソ属は関東地方の縄文時代中期の集落遺跡にしばしば共通する組成と考えられており、

東京都の下野谷遺跡や多摩ニュータウン遺跡群でも確認されている（中川ほか2019）。

#### ②大日野原遺跡（緑区佐野川）

縄文時代中期の集落が確認されている遺跡で、耕作土中より出土した資料や中央大学による学術調査資料等がある。この遺跡から出土し、博物館に寄託資料として個人の方からお預かりしている土偶装飾付深鉢形土器と人体文深鉢形土器がある。これらの顔面など装飾を施す土器は、中部高地を中心に分布しており、文化の広がりや人的交流を示す上で欠かすことのできない資料であるとして、市の文化財に指定されている。本館では土偶の愛らしさから「おびのっち」という愛称で呼ばれ、博物館のイメージキャラクターとして活躍している。この遺跡では、土地所有者が日常的に耕作を行っており、その際出土した文化財と思われる土器や石器などの資料が博物館へ寄贈されることがある。その資料を受入れ、活用できるようにするため、博物館で土器の洗浄、注記など基礎整理を行う。寄贈された資料を、勝坂遺跡の圧痕悉皆調査で培った経験の蓄積から、相模原縄文研究会で圧痕調査を実施することとした。合わせて、圧痕分析を依頼した民間調査研究者に講演会をお願いし、圧痕レプリカ法を体験するイベントを相模原縄文研究会で準備した。日頃の成果をお客様に体験してもらうワークショップを自分たちの手で実施したことは、大きな成果といえよう。

#### ③川坂遺跡（緑区中野）

旧津久井町道の道路建設に伴う発掘調査報告書を文化財保護課と博物館の共著で作成した（河本ほか2022）。そのなかで、圧痕調査は相模原縄文研究会が担当した。主に植物種子圧痕が確認されるなか、縄文時代後期の土器片1点から、コクゾウムシの圧痕が確認された。圧痕調査は、圧倒的に植物質由来のものが確認されるが、実は虫の圧痕も確認されるのである。

このように順調に圧痕調査を進めていた相模原縄文研究会だが、学芸員の異動やコロナ禍に伴い、しばらく会による圧痕調査は中断されていた。

令和5年に筆者が考古担当学芸員として所属し、7月から考古分野のミニ展示を企画し実施することとなった。ミニ展示とは、コロナ禍において少しでも多く博物館の展示普及を発信しようという取り組みとして、常設展示に加えて始められたものである。博物館での展示期間を終えると出張ミニ展示として他の所管施設や市内の公共施設、博物館と令和5年度から連携して展示の取組みを行うこととなった麻布大学いのちの博物館などへ出掛けるポータブルな展示として、好評を得ている。

ミニ展示のテーマは、展示期間が夏休みに差し掛かることから、虫をテーマにした子どもも楽しめるのでは

ないかと考えた。そこで、前述した川坂遺跡の調査成果であるコクゾウムシの圧痕土器から着想し、「コクゾウムシが教えてくれた！～縄文土器研究最前線～」とした。また、大日野原遺跡を調査した中央大学の小林謙一教授による調査成果からもコクゾウムシの圧痕がみられた土器片が1点確認されたこともあり、近年調査成果が目覚ましい縄文土器の圧痕調査分野から、市内で発見されたコクゾウムシの圧痕土器に焦点をあてた。この展示を実施するにあたり、金沢大学の佐々木由香氏に実演会等の相談をするなかで、熊本大学の小畑弘己教授をご紹介いただき、小畑氏の書かれた『昆虫考古学』（小畑2018）などと、小畑氏が科研費研究に伴い令和5年5月から開館したデジタルミュージアムの資料や調査成果を一部ご提供頂き実現した展示となった。ご尽力いただいた小畑氏、小林氏、佐々木氏にはこの場を借りて感謝申し上げたい。

また、展示期間が夏休みを含むため、ワークショップを行えないかと考え、相模原縄文研究会に相談した。その結果、以前は継続的に調査を実施していたので、引き続き協力したいと意見がまとまり、ミニ展示ではあるが、ワークショップを実施することとなった。

ワークショップで取り扱う圧痕調査対象の土器片はどうするか検討したところ、当初は以前に相模原縄文研究会が圧痕を採取した遺跡の土器片を使用して実施してもよいかと考えた。しかし、せっかく圧痕調査を再開するのであれば、新たな圧痕が見つければこれからの相模原の縄文時代像を研究する上で意義深いし、体験者も面白いのではないかという意見があった。そこで「シソ属果実を混入した縄文土器」（中川ほか2018）が中央土坑墓群から発見された相模原市南区の下溝遺跡群下原遺跡の土坑から出土した土器を対象に調査を進めることにした。

### 3. 圧痕調査対象とした下原遺跡B地区の遺物について

ここでワークショップに圧痕調査遺跡として選択した下原遺跡について簡単に触れる。下原遺跡は相模原市南区下溝に位置し、土地区画整理事業による調査のため、便宜的に南北A・B地区に調査区が分かれている。今回調査対象とするB地区は40軒の縄文時代住居址が確認され、北側で上中丸遺跡の集落（住居址122軒）と一部重複する（第2図）。中期中葉勝坂式土器期（以下、勝坂期）を主体とする約5,500年前の小規模環状集落であり、住居址に囲まれた中央土坑墓群に土器等の遺物を伴う土坑が確認されている。この中で、44号土坑からシソ属の圧痕が多量に練り込まれた勝坂期の土器が出土した（第3～5図）。その詳細な成果については前述の報告書のとおりである（中川2018）。約60基の土坑に伴う出土土器は、

報告書掲載、非掲載合わせて4箱分確認されている。そこでワークショップでは非掲載の土器片を圧痕調査の土器として取り扱うことにした。

#### 4. ワークショップの事前学習と西東京市の取り組み

ワークショップを実施することが決まった頃、ちょうど西東京市教育委員会が令和5年6月29日に多摩六都科学館で圧痕体験イベントを実施するという情報を得た。そこで、相模原縄文研究会の、有志3名と共に研修を兼ねてイベントに参加させてもらうことになった。イベントは西東京市の亀田直美氏が佐々木氏に講師依頼し、佐々木氏の教え子である昭和女子大学と國學院大学の学生が実習として一般のお客様に圧痕調査方法について体験を通じた学びを伝えるというもので、一般部門、子供部門に分けて実施していた(写真2~9)。西東京市は縄文時代中期の集落遺跡である国史跡下野谷遺跡が所在し、日々史跡整備が進められている。遺跡の普及の一貫として、このイベントを実施しており、すでに10年近く経過している。学生の参加は授業の一貫ということもあり、30人以上が参加し、圧痕の取り方のデモンストレーションや道具の準備を担当している。イベントでは本物の土器を用いず、圧痕を再現したレプリカ土器を使用して体験していた。このレプリカ土器は大変よくできており、圧痕を体験するには十分なもので、このイベントのために特注したものだそうである。また、体験にあたりワークシートやクイズなども体験者によくわかる上、楽しいものが準備されており参考になった。しばらく調査をしていなかった相模原縄文研究会のメンバーも、記憶を呼び覚ますには十分な時間を過ごすことができた。

#### 5. 学生ボランティアの協力を募る

前述の西東京市教育委員会による圧痕体験イベントの際、学生さん達に博物館のこと、同様なイベントを実施するので可能であれば参加して欲しい旨を説明した。学生さんのメリットとして、イベント終了後の展示やバックヤード案内に加え、ボランティア証明書の発行を提示した。ボランティア証明書とは、文字通りイベントに参加したことを証明するもので、近年は就職活動の際に自己PRとして添えることの出来る資料となるそうである。今回の多摩六都科学館も館長名で発行されていた。募集はロゴフォームで行い、随時参加可能な日時の確認と連絡事項をメールで伝えた。メリット提示による効果もあってか、都内に位置する学校のため、相模原へ足を運ぶにも物理的な距離のハードルも高かった割に、千葉大学の学生さん1名を加え、5名の学生さんから協力いただけるという連絡があり、安堵した。なかには、圧痕調査

をやりたかったからという学生さんもいて、おおいに嬉しかった。将来を担う学生さんの活躍の場の提供も博物館の役目として大事であると思う(写真1)。



写真1 学生ボランティアと体験者イベント実施風景

#### 6. 圧痕ワークショップ開催にあたって

西東京市教育委員会での研修結果をもちより、改めてどのようにワークショップを実施するか検討した。本物の土器で実施したいが、作業はコツがいるため、指導する側のスキルも含めて考えるとハードルが高いと判断した。西東京市教育委員会の協力を得て、本市でもレプリカ土器を借用して実施するという結論に至った。また、顕微鏡で観察することが、圧痕調査をする上で大切であることがわかったので、作業手順に加えることにした。顕微鏡は、自然分野もある総合博物館なので用意できた。改めて必要な道具は買い足し、実演会1回、ワークショップ3回のイベントに臨んだ(写真10~15)。

#### おわりに

本稿では相模原縄文研究会とこれまでに歩んできた圧痕調査の流れを振り返った。実演会やワークショップの詳細や成果は次回に報告する。これから地道な調査成果をコツコツと積み重ねていく予定である。

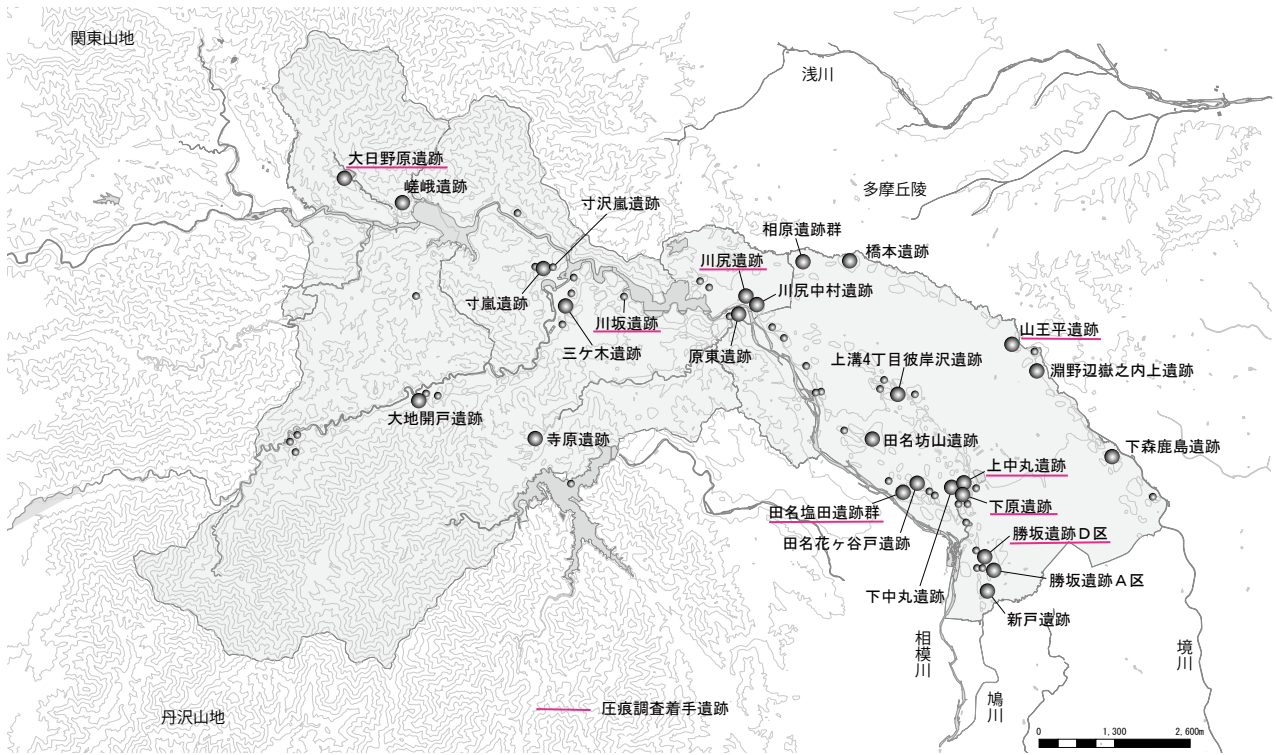
小畑弘己 2018『昆虫考古学』角川選書

河本雅人ほか 2022『川坂遺跡第3次調査』相模原市埋蔵文化財調査報告68 相模原市教育委員会 相模原市立博物館

佐々木由香 2019「土器種実圧痕から見た日本における考古植物学の展開」『アフロユーラシアの考古植物学』中川真人ほか 2018「シソ属果実を混入した縄文土器」『相模原市立博物館研究報告』第26集

中川真人ほか 2019「勝坂遺跡の縄文土器種実圧痕にみる植物利用」『相模原市立博物館研究報告』第27集



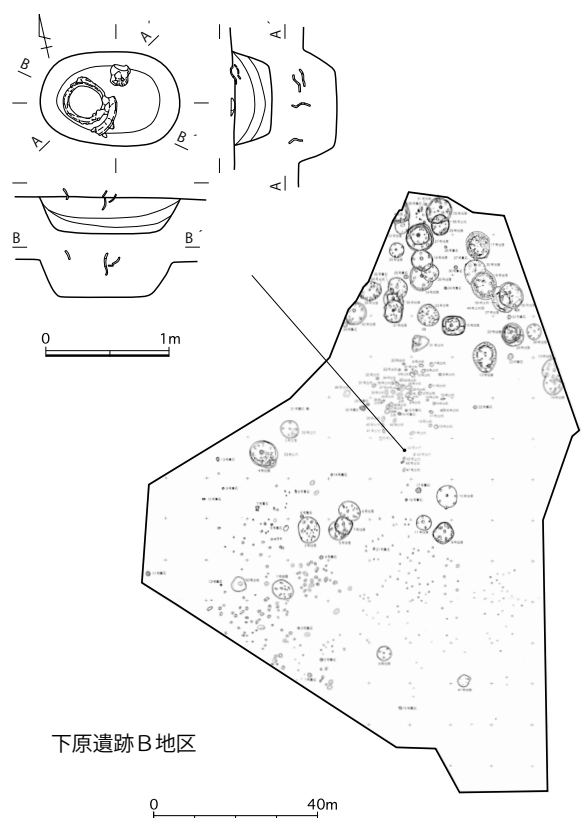


第1図 相模原市内縄文集落分布と圧痕調査に着手した遺跡



第2図 下原遺跡B地区・上中丸遺跡縄文時代住居址分布図 (集落跡：●中期中葉 ○中期後葉)

○シソ属果実を混入した縄文土器が出土した44号土坑

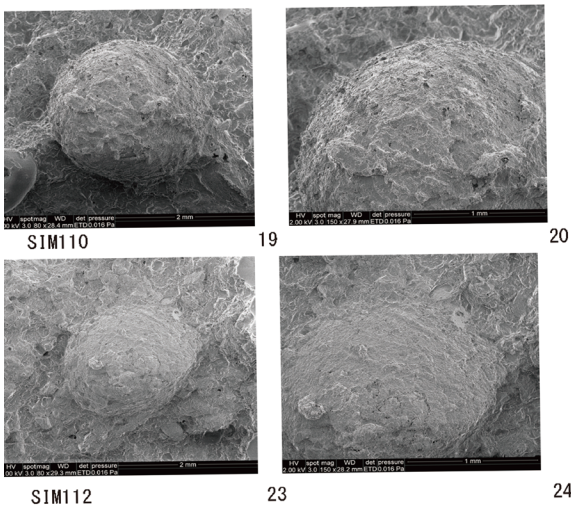


第3図 下原遺跡B地区遺構分布図と44号土坑図

★ 圧痕土器出土位置

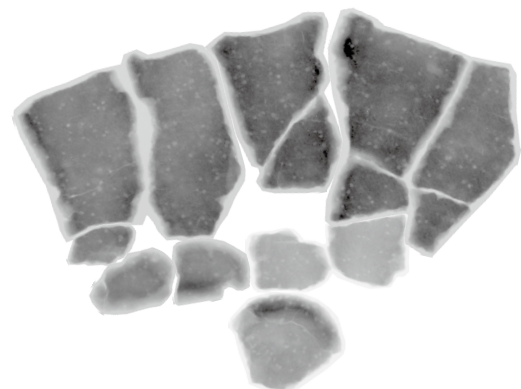


第4図 下原遺跡B地区土坑分布図および44号土坑出土圧痕土器写真



シソ属果実圧痕 SEM 画像

※白い斑点が圧痕。土器胎土内部にも約200点あまりの果実が存在する可能性がある



下原遺跡土器圧痕軟X線撮影画像（合成）

第5図 下原遺跡B地区44号土坑出土圧痕土器の圧痕SEM画像およびX線撮影画像



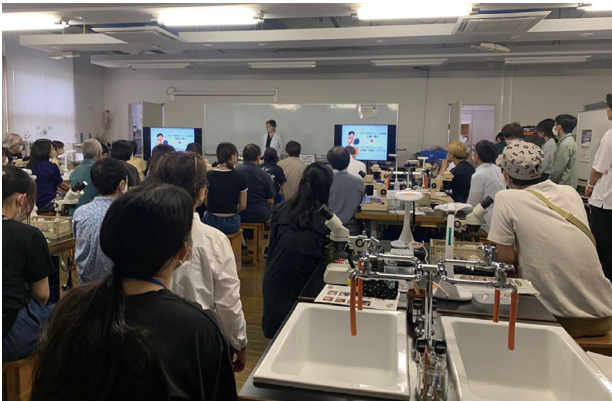


写真2 多摩六都科学館 イベント風景



写真3 多摩六都科学館 イベント体験



写真4 多摩六都科学館 イベント使用道具一式

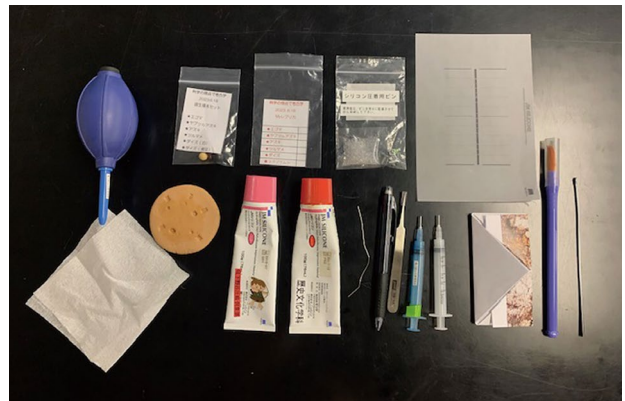


写真5 多摩六都科学館 圧痕調査道具セット



写真6 多摩六都科学館 記念品贈呈



写真7 多摩六都科学館 パンフレット

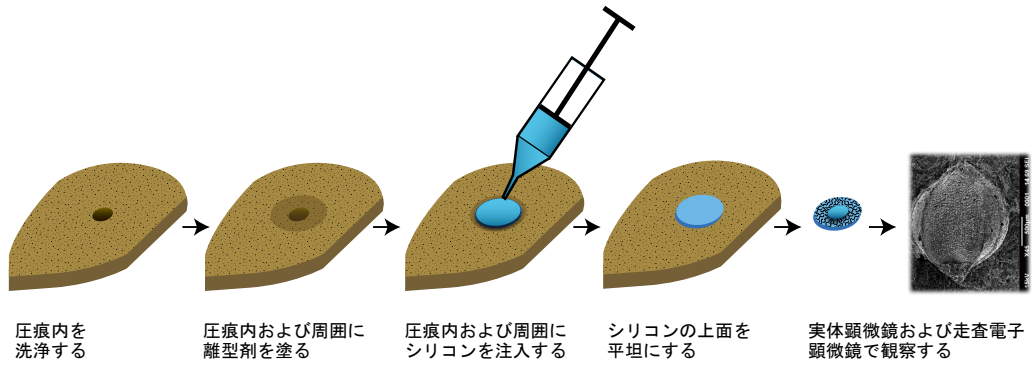


写真8 多摩六都科学館 学生ボランティアの実演①



写真9 多摩六都科学館 学生ボランティアの実演②





第6図 圧痕レプリカ法による種実圧痕の採取方法 (佐々木 2019)



写真10 相模原市立博物館 圧痕調査道具セット

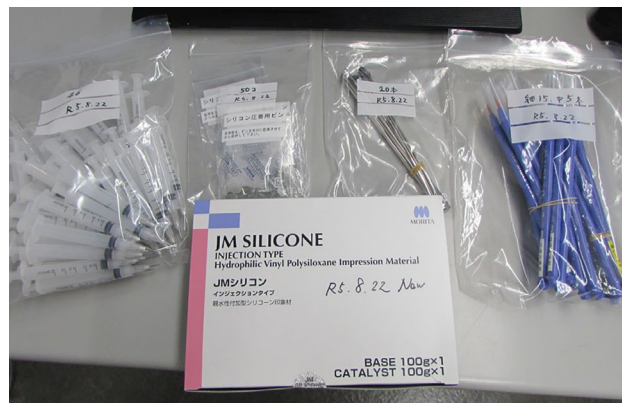


写真11 新たに購入した圧痕調査道具



写真12 ミニ展示関連事業 実演会の様子



写真13 実演会で発見されたマメ圧痕



写真14 ミニ展示関連事業 ワークショップの様子



写真15 ワークショップ等の圧痕調査成果を後日確認